第一〇〇回 日本医史学会 学術大会 演題目次

会長講演

身体観の歴史　人は「からだ」をどうみてきたか……酒井シヅ……(147)

特別講演 1

茶と日本人……熊倉功夫……(155)

特別講演 2

韓医学の歴史……奇昌徳……(158)

一般口演

1　新発見「大同類聚方」に関する大同三年五月三日の詔文……後藤志朗……(160)

2　浅田宗伯の自筆稿本類―国会図書館鶚軒本……町泉寿郎……(162)

3　清医胡兆新の『胡氏方案』について……郭秀梅・岡田研吉……(164)

4　わが国の近世初期の医療についての一考察　一、古写本、鍼灸秘書……戸田静男・亀節子……(166)

5　「後法興院記」に表れた丹波親康の事跡について……戸出一郎……(168)

6　「言経卿記」中の医療について……中山沃……(170)

7　神宮医久志本氏とその秘方……中西淳朗……(172)

8　異本病草紙に就いて……林美朗・野嵜理……(174)

9　アヴィセンナ（イブン・シーナ）の「医学典範」（ラテン語訳）における精神医学（第二回）……濱中淑彦……(176)

10　系統解剖学の起源としてのヴェサリウス解剖学……坂井建雄……(178)

11 ウイリアム・ハーヴィ『普遍解剖学講義』における心臓の運動の提示……月澤美代子……(180)
12 Jan Evangelista Purkyněの生涯と業績……高橋昭……(182)
13 中国伝統医学と道教（第二十回）籤……吉元昭治……(184)
14 宋以前の傷寒論について―朝鮮古医書「医方類聚」からの考察……牧角和宏……(186)
15 田中彌性園蔵傷寒論の考証……田中祐尾……(188)
16 『金匱要略』水気病篇の「疝癩」について……渡辺賢治・花輪壽彦……(190)
17 検黴制度の導入と英国「伝染病予防法」―国権問題と日本人医師の養成―……大川由美……(192)
18 中国における梅毒の病名史……梁永宣……(194)
19 華岡青洲の系譜に関する新知見―海南市の柳川家と川端家―……松木明知……(196)
20 華岡青洲自筆萬病一毒之説……高橋均……(198)
21 ポンペが松本良順に贈ったジッヘル著『眼病図譜』について……山之内外一・千葉弥幸……(200)
22 オランダ人医師ファン・デル・ヘーデンと子孫・縁者たち……蒲原宏……(202)
23 島村鼎甫とウイリス及びボードウインの『日講紀聞』……津下健哉……(204)
24 『ウイリアム・ウイリス文書』にみるW・ウイリスの医学教育……小宮山道夫……(206)
25 パリの古い病院……今泉孝……(208)
26 パリ大学旧医学部大円形講堂にある壁画について……清水陽人……(210)
27 大選帝侯時代のベルリン医事、とくにブランデンブルク医事勅令について……泉彪之助……(212)
28 英国医史における学と職と―法制的考察……栗本宗治……(214)
29 ヨハンニティウス（フナイン・イブン・イスハク）の「ガレノスの小治療学入門」における non-naturals の概念……平尾真智子……(216)

30　九州における医史学研究の系譜 (一) 岩熊哲の業績と医史学観について……佐藤　裕……(218)
31　飯島魁と近代寄生虫学の系譜……寺畑喜朔……(220)
32　郡医と鷗外の父、森静男について……木村　繁……(222)
33　九州における近代整形外科学の祖、住田正雄の生涯……小林　晶・長門谷洋治……(224)
34　済生学舎の顕微鏡科実地演習—特に原玄一郎のペスト菌標本について—……唐沢信安……(226)
35　行われなかった正月儀礼……水谷惟紗久……(228)
36　日本における養生論の引用書目の変遷……滝澤利行……(230)
37　初代山脇道作とその門人達の伝記に関する新資料……八木淳夫……(232)
38　三位法眼糟尾家と録事法眼智玄……石原　力……(234)
39　『阿蘭陀外科指南』の背景について……ヴォルフガング・ミヒェル……(236)
40　テリアカの再検討……中村輝子・遠藤次郎……(238)
41　レイディ・メアリの息子が人痘接種を受けた日付と場所について……小田泰子……(240)
42　プレンク (J. J. E. von Plenck, 1739-1807) について……石田純郎……(242)
43　ルイの「肺炎に対する瀉血の効果」について……藤倉一郎……(244)
44　明治、大正期の埋葬許可証にみる病と死亡年齢……壹岐裕志……(246)
45　陸軍における航空医学の夜明け……黒澤嘉幸……(248)
46　昭和初期、二私立医専の創始について—大阪高等医専、大阪女子高等医専—……長門谷洋治・坂上俊之……(250)
47　九華筆「扁鵲倉公列伝」について……宮川浩也……(252)
48　『看病用心鈔』成立の社会的背景……杉田暉道……(254)
49　江戸期本草家の北陸への関心(三)—野呂元丈の越中国での足跡……正橋剛二……(256)

50 幕末期、院内銀山の医療と近郷の医師達「門屋養安日記」にみる庶民の医療(三)……莇　昭三……(258)
51 戴天章の温病腹診研究……梁　嶸……(260)
52 『痧脹玉衡』所載治験例の分析……友部和弘……(262)
53 『灸焫塩土伝』の意義……篠原孝市……(264)
54 田代三喜が中国から持ち帰ったといわれる『大徳済陰方』の検討……遠藤次郎・中村輝子……(266)
55 暉峻義等と医学史研究—奨進医会にかかわっていた人—……岡田靖雄……(268)
56 足立文太郎のひとと業績について……本宮かをる・オルリー・レジス……(270)
57 明治八年から一六年までに実施された内務省医術開業試験について……樋口輝雄……(272)
58 日本における医学部生化学（医化学）の歩み……柴田幸雄……(274)
59 日本の病院及びその機能の医学史的研究……長谷川敏彦……(276)
60 農村医学の発展—佐久病院における臨床疫学的方法の実践—……杉山章子……(278)
61 国際保健への応用を勘案した日本の乳児死亡の医学史的研究……岡村恭子・村山伸子・長谷川敏彦……(280)
62 近代日本の医療分野人材開発の政策について（医師と産婆の役割）……近藤久禎・長谷川敏彦……(282)
63 『正骨範』から見た江戸時代の整骨療法……陶恵寧……(284)
64 『解馬新書』の骨学用語について……松尾信一……(286)
65 男装の英国陸軍女医ジェイムズ・バリ……柳澤波香……(288)
66 明治女医史の基礎的研究(三)　婦人共立育児会病院……三﨑裕子……(290)
67 江戸以前全医学著作のインターネット検索……真柳誠……(292)
68 中国古代における一般的医学観について……和田裕一……(294)
69 清以前本草図の作風と学術価値……鄭金生……(296)

70　熊宗立伝—判明した生没年……小曽戸　洋・王　鉄策……(298)

誌上発表

71　『公文録』にみる土屋寛信の沖縄派遣……深瀬泰旦……(300)
72　「中日両国疫病史対照年表」作成にあたって……邵　沛……(302)
73　パオロ・ザッキア「法医問答」にみる性別の判定……西大條文一……(304)
74　朝鮮前期の疫病流行に関して……權　卜揆・黄　尚翼……(306)
75　朝鮮時代侵襲的外科術の発達……中　佐燮・奇　昌徳……(308)
76　韓国における宣教医（第一報）……高安伸子……(310)

発表日時

特別講演(1)、(2)・一般口演1～29　平成一一年五月一五日(土)午前八時三〇分～午後五時三〇分

会長講演・一般口演30～70　平成一一年五月一六日(日)午前八時三〇分～午後六時

≪本号の表紙絵≫

観　臓　記　念　碑

明和8年(1771) 3月4日、杉田玄白と前野良沢らが観臓したのを記念した観臓記念碑が、大正11年5月10日に小塚原刑場跡に奬進医会によって建てられた。表紙の絵は、竣工したときに撮った写真である。碑の前に立つのは、右より細野順、高橋石工、藤根常吉、尼子四郎、宮本百全、富士川游、緑川興功の諸氏。このとき、銘板に記された碑文は次の通りであった。

明和八年三月四日前野良沢杉田玄白中川淳庵諸氏此地ニテ刑死ノ解腑セラルルヲ観テ発明スル所アリ直チニ和蘭解剖図譜ノ翻訳ニ着手シ四年ノ星霜ヲ閲シテ遂ニ解体新書五巻ヲ大成ス実ニコレ我国西洋医学ノ濫觴ナリ

しかし、戦時中、昭和20年2月25日にこの一帯を襲った大空襲のために、記念碑は大きく破損された。戦後、昭和26年に撮影された記念碑の写真をみると、碑は左上部から左側にかけて大きく破損し、扉のレリーフの下にあった銘板がない。戦後の混乱期に盗難に遭ったということである。見る影もない姿になっていた。そこで、昭和34年に東京で第15回日本医学会総会が開催されたときに、日本医史学会、日本医学会、日本医師会が協同して、この記念碑の再建をはかった。設計は谷口吉郎東京大学教授に依頼し、碑文も緒方富雄氏によって改められた。全く別の記念碑が最初の場所から少し離れた回向院入口に建てられた。

その前年、昭和33年に、ターヘルアナトミアの翻訳が始った場所を記念して、中津藩中屋敷の跡（聖路加看護大学の前のロータリー）に緒方富雄氏らの企画による蘭学記念碑が建てられたのである。

その後、昭和49年に都市計画による回向院前の道路拡張で観臓記念碑が建つ場所を縮小せざるを得なくなった。そこで、回向院の住職と谷口吉郎、緒方富雄、小川鼎三、大鳥蘭三郎諸氏が検討した結果、観臓記念碑を縮小して、改築なった回向院のピロッティの内壁にはめ込まれた。いまの観臓記念碑は3度、姿と場所を変えたものである。　（参考文献：図録日本医事文化史料集成　第5巻　三一書房）

（酒井　シヅ）